

地域情報（県別）

【栃木】子ども食堂に学習支援、将来的には施設展開も「地域に助けられた恩返しを」-吉住直子・れもん在宅クリニック院長に聞く◆Vol.3

2023年7月21日（金）配信 m3.com地域版

臨床検査技師とヘルパーの経験を経て医師になり、2022年12月に「れもん在宅クリニック」（下野市）を開院した吉住直子院長。高齢者施設の立ち上げも構想するなど「お年寄りを支えたい」思いは一貫している一方で、ヘルパー時代から地域の子どものための活動も継続。「貧しかった子ども時代、周囲の人たちに助けられた恩返しを」とボランティア団体を設立し、子ども食堂の運営や学習支援を行っている。（2023年6月6日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



吉住直子氏（クリニック提供）

——吉住院長は臨床検査技師とヘルパーの経験を経て、医師になりました。自身のキャリアが在宅医療にも生きてい
るのではないのでしょうか。

ヘルパーの経験はとても生きていますね。患者さんのご家族の大変さに思いを馳せながら、治療だけでなく介護の面も含めてアドバイスできることは長所と言えるのではないのでしょうか。

例えば認知症の高齢者の場合、医師の前では割としっかり受け答えができており、周囲から見るとあまり大変そうに映らないことがあります。しかし、リラックスできる家族と接するときは症状が強く現れ、「実際は介護の労力がとても大きい」ことがよくあります。ヘルパー時代には徘徊をよくしていつときも立ち止まらない人もいて、「あの山に行くんだ」と数時間も外歩きに付き添ったり、逆に玄関で引き止めたりする必要があり、苦労したことがありました。

こういったヘルパーとしての経験から、患者さんへの医療やケアだけでなく、ご家族の介護調整や心理的なサポートを含めてご提案することを心がけています。

——医師以外の医療従事者に話を聞くと、医師に「意見を伝えることが大変」と話す人もいます。

臨床検査技師のときに私も同じように感じたことがありました。例えば、検査結果でパニック値を確認して担当医に報告するときなどに気を使うことがありました。「この時間に電話をして大丈夫だろうか」「このような言い方をすることで気分を損ねないか」。技師から医師に話すことがいかに大変か身をもって分かっているので、私がおの立場になったらスタッフに不要な気を使わせない、話しやすいパートナーになろうと考えていました。

特に在宅医療は多職種が関わる分野なので、コミュニケーションを取りやすい医師であることは重要だと思います。ケアマネジャーや訪問看護師、ソーシャルワーカー、管理栄養士、事務スタッフなど多職種で構成される輪の中心に患者さんがいて、医師はその輪をつくる一つのピースのようなもの。患者さんやご家族のほか、在宅医療に関わる多職種とも気軽かつ密にコミュニケーションを取りたいと考えています。

——開業から半年というスパンやクリニックの規模感に比べ、事務が5人もいるのは特徴だと思いました。

事務を増やしたのは別会社で運営している訪問看護ステーションの仕事にも携わってもらうほか、将来的に施設展開も図れないかと考えているためです。

私たちがつくりたいとイメージしているのは、医療用麻薬や在宅酸素などを使っている高齢者でも安心して入所できる有料老人ホームのようなものです。高齢者施設の中には入所制限を設けており、このような人は利用できないことがあるんですね。ご家族の負担軽減のためにショートステイを利用しようと試みても難しいことがあるのです。

そこで、当院の患者さんのご家族が介護などで大変なときや疲れているときに、「うちの施設を利用してはいかがですか」と提案できるようにしたい。地域にある既存の施設と関係を築きつつ、当院が介護の面も含めた受け皿になれば、医師が運営に関わることで利用者の急変時にも医療的な対応を素早く行うことができると思います。

——在宅医療を通して高齢者を診つつ、将来的には家族の生活を支えたい思いもあると。一方で、先生は子どもに向けた取り組みも行っていますね。

ヘルパー時代に地域の子どものために学習支援を始めました。正式にボランティア団体「おおるり会」（下都賀郡壬生町）を立ち上げたのは2019年で、以来、コロナ禍で中止した時期もありますが、子ども食堂の運営と、近くにある獨協医科大学の学生による学習支援を続けています。

きっかけは、私の子ども時代にあります（詳細はVol.1を参照）。父が病気で倒れて仕事を続けられなくなり、私は経済的に苦しい家庭で育ちました。お米を買うのも困る状況になったこともありましたが、周囲の支えのおかげで育つことができました。母が父の付き添いで家にいないときは友人の家でご飯を食べて泊まらせてもらったり、高校の制服はリサイクルショップから譲り受けたりしました。「自分に余力があるのであれば、地域に向けてできることをしたいな」と思うようになりました。



地域で行っている子ども食堂の様子（クリニック提供）

——最後に、今後の展望をお聞かせください。

病診連携を進め、病院の医師に在宅医療を知っていただくほか、診診連携にも取り組みたいと考えています。開業医の患者さんには、体が不自由になって通えなくなっているものの、ご家族が受診して薬をもらっているケースもあると聞きます。このような場合に当院が訪問してサポートし、患者さんが元気になったら主治医の先生に返す、といった双方向の協力関係を築けないかと。

私は在宅医療に力を入れていますが、患者さんにとっては外来受診するなかで信頼を深めたかかりつけ医に訪問診療も行ってもらう方が望ましいでしょう。一方で、開業医はマンパワーが限られるため、ほとんどは「外来注力」

「在宅注力」に分かれているのが現状です。このはざまを埋めるような活動ができれば、という思いがあります。

ゆくゆくは医学生や医師の教育にも携わりたいですし、また子どもにももっと関わっていきたいです。私は将来的に里親になりたいと考えており、そのために研修も受けました。開業医としても小児科医の協力を得ながら子どもも訪問し、これから開設したい施設では子どもも受け入れる、といった構想を描いています。

◆吉住 直子（よしずみ・なおこ）氏

臨床検査技師とヘルパーの経験を経て医師を志す。2014年群馬大学医学部卒。自治医科大学附属病院で初期・後期研修を受け、JCHOうつのみや病院、さつきホームクリニックを経て2022年12月にれもん在宅クリニックを開院。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

